

## 尖底土器を作る

徳永 哲秀

I はじめに	VI 製作の結果、および問題点とその解決
II 箱清水式土器作りから	VII 乾燥時の痕跡
III 使用時と同様の設置方法ではないか	VIII 施文と成形
IV 底部に跡が残っているか	IX おわりに
V 細久保式土器の再現	(写真 巻頭掲載)

### I はじめに

土器作りを始めたころから、尖底土器の作り方は気掛かりであった。どう据え付けるのか確実な方法を思い付かない。逆位に据えれば作れるのではないかといわれるが、実際に作ることを考えると、器形のイメージを持つことが難しいし、成形技術の面からも最大口径部から次第に器形を絞ってゆくことは容易ではない。容器を目指した初期の土器作りがその不自然な成形法を採用していたとも思えなかった。

弥生土器を作りながら疑問は深まるばかりである。高杯の脚部は逆位で作るが、正位にして口径を絞ってゆくことが難しいからにほかならない。土器作りを重ねるほどやはり正位に据えて作ったはずだと思うようになった。

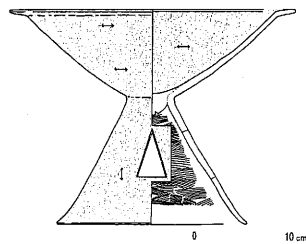
そんな体験によって得たいくつかの知見から、思いがけず尖底土器の作り方にひとつの解決策があることに気付いた。その経緯と、実際に尖底土器を作ってみて明らかになった事実を、紹介したい。

### II 箱清水式土器作りから

箱清水式土器（弥生時代後期）<sup>1)</sup>の成形で最も難しいのは、開きが強い（外傾指数が大きい）場合である。重ねてゆく粘土紐の重さによって、成形部分が垂れ下がってしまう。開きの強いものほどより乾燥させ硬化させてから、粘土紐を積み上げてゆく、良い方法が見つからない。苦肉の策の一つとして試みてみた方法が、尖底土器作りにヒントになる。

松原遺跡の赤彩土器の再現を目指して土器作りを続ける中で、大型高杯の成形には格別苦勞した。杯部を積み上げてゆく、良い方法が見つからない。苦肉の策の一つとして試みてみた方法が、尖底土器作りにヒントになる。

図1に示した松原遺跡の高杯<sup>2)</sup>の場合、杯部の最下部を



第1図

手びねりで作り、逆位に伏せて置いてしばらく乾燥させ、一定の堅さにしてから正位に置き直し粘土を積み上げた。この際下部の周囲に粘土を張り付けて倒れないようにした。

この方法は尖底土器にも使えるのではないか。そう思ったが、実際に作ってみるまでの確信はもてなかった。問題があった。土器をまったく回転することができない点だ。何らかの『土器回転のための用具』あるいは「ろくろ」の存在が考えられる弥生時代の土器形成の場合<sup>3)</sup>上記のような設置を回転用具の上にすればよい。しかし縄文土器については、設置した土器を回転できる用具を前提にした土器作りを考えることはできないと思った。

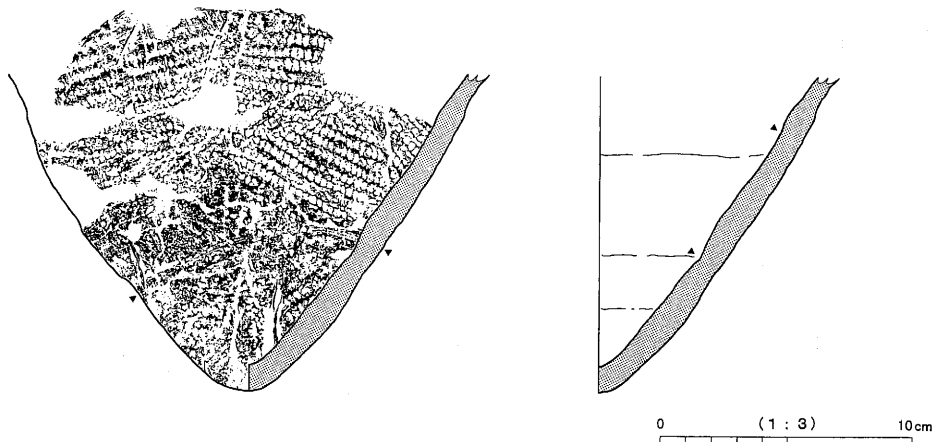
いずれにしても完全に固定して土器を作ることは難しい。土器作りをしてみるとよほど大きな土器以外は製作者が土器の回りを動き回することはしなかったであろう、できるだけ回転しやすい土器の設置をする合理性に気付かなかったはずはないであろう、と思わせられる。かくして上記の尖底土器の製作法も棚上げになっていた。

### Ⅲ 使用時と同様の設置方法ではないか

目の前に、大町市山の神遺跡の尖底土器（巻頭写真1）が復元を終えて、ずっと置かれていた。その尖底部の見事な均整の取れた形をみていて、これを地面に突き刺して使っていた尖底土器の不思議さを思っていた。内面のこげつきの跡も、底部最下部の加熱されなかった範囲をはっきり示していて、地面に突き刺して煮炊きに使っていたことは間違いなからうと思わせる。

突然の思い付きだった。…なんと簡単なことに気付かなかった。地面に突き刺して作ればいいのではないか。使い方の不思議は作り方の結果だったのではないかと気付く。箱清水式土器の高杯の杯部を作ったと同じように、手びねりで尖底部を作り一定の乾燥を経て、地面に穴を掘って設置すればいくらかでも回転することができるのではないか。この時、とっさの思い付きに興奮し、この方法しかないと確信していた。

いつものように、身近な諸氏にこの思い付きを訴えて歩き、幾多の助言と協力をいただくこ



第2図

とになった。

#### Ⅳ 底部に跡が残っているか

鶴田典昭氏と賛田明氏の助言があって、小諸市郷土遺跡の縄文施文尖底土器の底部を観察することができた<sup>4)</sup>。実に鮮やかに、回転によって残されたと思われる『押圧をうけながら生じたと思われる擦痕』がみられる。しかも何らかの側面からの圧迫の一部を受けて内面に歪みを残している（写真2・3・図2）。その擦痕や歪みの位置からみると、まさしく穴に差し込んで回転した時にしかできないものだといえる。穴に入れて回転すれば、穴の辺縁部からの押圧を受けやすくこうゆう擦痕や歪みができるであろう。この土器の場合器面が比較的柔らかい段階で穴に設置したのだと判断した。

ついで上記・山の神遺跡の山形文を施す細久保式土器（写真4）の底部を観察した。一見観取りにくい、やはり『押圧を受けながら生じたと思われる擦痕』がみられる。擦痕が山形文を、押圧と摩擦によって潰しながら、残されている。摩擦によると思われる磨き光沢もみられる。その位置も郷土遺跡の土器と同じである。明らかに回転された痕跡だといえる。郷土遺跡の土器の『押圧擦痕』との違いは、穴に設置した時の乾燥状態の違いにある。山の神遺跡の土器はより乾燥が進み器壁が堅くなってから穴に設置されたはずだ。

さらに、小諸市三田原遺跡の縄文施文小型尖底土器（写真5）の底部の観察をする。いっそうかすかで判別しにくくはあるが、ほぼ同様の位置に『押圧擦痕』が認められる（写真6）。軽い小型土器であるため痕跡がはっきり残らなかったものと思われる。

以上、いずれの痕跡も焼成前のものであることは明瞭で、使用痕ではない。

#### Ⅴ 細久保式土器の再現

上記山の神遺跡の細久保式土器は完形に近く、残存状態が極めて良好であるので、これを資料土器として細久保土器の再現を試みることにした。

- ①まず資料土器の文様を観察し山形文の施文具を作る。
- ②地面に穴を掘ることを想定し、粘土で資料土器の底部に合わせた穴を作る（写真7）。
- ③底部を手びねりで作りしばらく乾燥し（写真8）、器形が歪まない程度の堅さになってから穴に据え付ける（写真9）。
- ④およそ直径1.5cmの粘土紐を積んで成形し（写真10）、しばらく乾燥させる。この時『押圧擦痕』ができる（写真11）。
- ⑤最初に手びねりで成形した山形文の施文をする。『押圧擦痕』は消える。
- ⑥しばらく逆位において乾燥させる。
- ⑦再び穴に設置し粘土紐1本を積み成形する。この時底部に『押圧擦痕』がつく（写真12・13・14）。
- ⑧しばらく乾燥させ、施文具で歪まない程度の堅さになったら1本前に積み上げた粘土帯部分の施文する。

⑨以下同じように、成形・施文を繰り返してゆく（写真15）。

以上のように製作したが、ここで施文をいつするかが問題であった。資料土器の山形文の施文は、ほぼ粘土帯1本分の幅の施文具を横転がしにして押圧している。この施文を器壁粘土がどのくらいの堅さになった時にするかが難しい。柔らかすぎると器壁がへこむし器形自体も歪んでしまう。堅すぎた場合、描出施文具（例…簾状工具）<sup>5)</sup>ほどではないが、押圧施文具でも施文刻印が難しくなる。器形の成形を完成してしまってからでは大型土器の場合下部の施文刻印は上手くできなくなる。そこで2つの方法を考えて行ってみた。

1つはすでに箱清水式土器の再現に際して採用した方法である<sup>6)</sup>。器形成形を完了した後、ある程度全体を乾燥し器壁に一定の堅さを持たせた上で、施文部位に化粧土をかけてしばらく置き、水分が浸透して器壁の表面だけが柔らかくなった状態で施文する。これは極めて有効性がある。化粧土の代わりに水を使うと器面を流れやすくまた器壁に水分が染み込みにくい。化粧土を用いると施文部全域の器壁表面に均一に柔らかさを得ることができる。器自体は器形を損なわれない堅さを保ち、表面は施文刻印が可能な柔らかさを持つため、器を回転用具の上に置いて施文することも、手に持って施文することもできる。尖底土器でも下部からでも上部からでも施文が可能である。底部を先に施文し、しばらく逆位に置き若干乾燥させた上で穴に設置し、上部に向けて施文することもできるし、穴に設置したまま上部から施文し、若干の乾燥後手に持って底部の施文をすることもできる。もちろん、手に持って施文部位全域を一度に施文することも、すべて逆位において施文することもできる。

いずれの施文方法が採られたかは、土器に残された施文とその他の痕跡から推定しなければならない。

当資料土器は、下部から上部に施文されている。その様相からすでに記述したように、新たに積み上げた粘土帯の下位の、施文しやすい堅さになった粘土帯に施文する方法を用いた。こうすれば、先に施した文様を潰さないで適度な器壁の堅さに即した施文ができる。これが2つ目の施文法である<sup>7)</sup>。

## VI 製作の結果、および問題点とその解決

以上のように尖底土器を製作してみた結果、穴を掘って正位に設置し、粘土紐を積み上げ、土器を回しながら成形してゆくことが可能なことが明らかになった。また施文にもこの穴が使えることもはっきりした。

押圧擦痕が予想どうりの箇所に残ること、それが施文時との関係でみると成形に伴う痕跡であったり施文に伴う痕跡であったりすることも見えてきた。郷戸遺跡の縄文施文土器の場合、施文前の成形時に、比較的柔らかい状態で穴に据えて生じたと思われる土器の歪みがある。押圧擦痕の位置はその歪みの位置とずれている（図2）。押圧擦痕の方は下部に縄文を施文した後、穴に据えて回転しながら上部に縄文を施文した時に生じたものと見受けられる。あるいは先の再現と同様に、施文と成形を交互に行った際の土器回転の跡かもしれない。

しかし、問題点もあった。次第に積み上げて行くにしたがって不安定な負荷が設置部にかか

り回転しにくくなってゆく。粘土で作った穴の縁が堅すぎるためかもしれない。それに、押圧擦痕の様相が観察した土器のものと少し違う。実際の土器では、ちょうど沈線文や櫛描文の施文に用いた竹などの棒状具で、押しつけながらこすったような痕跡を見せている。

製作しながら一つの解決策を思い付く。

穴の中にクッションになるように枯れ草を入れてみた(写真16)。その結果予想どおり、実に「快適な回転」と、見事に観察知見と一致する「押圧擦痕」が得れたのである。その押圧擦痕が生じる位置も、やはり穴の縁付近に対応している(写真17)。穴の中にクッションとして入れるものによっては、痕跡の様相に細かい違いがでてくることも分かった。二つの問題点は一度に解決することになった。

## VII 乾燥時の痕跡

先に述べたように、『穴』設置を思い付いた時、上田典男氏にも助言を頂いていた。上田氏はかつて尖底土器を作ってみたことがあるといわれる。井口氏の提言があって、三脚状に組んだ棒上に設置して、尖底土器を作ったという(写真18)。その棒の圧痕ではないかと推定される痕跡が残っている事例があることを含め、尖底土器の製作に関する井口直司氏の論文があるということである。

上田氏にその論文を読ませて頂けることになって、井口氏の観察された尖底土器底部の各種圧痕の様相が、筆者の観察した前述の土器や製作した土器の押圧擦痕と共通していることに感激する。井口氏は撚糸文土器や条痕文土器にみられるその痕跡をつぶさに観察されていて、その痕跡について、土器製作の過程を①成・製形②施文③焼成とされた上で、施文後の痕跡であることから乾燥時のものであろうといわれている。その点を中心に井口氏から直接お話を伺うこともでき、大いに参考になった<sup>8)</sup>。

確かに井口氏のいわれるように乾燥時の痕跡の場合もあると思われる。最後に残される痕跡には、乾燥過程にできたものが多いことは十分推察できる。それらの多くが、ここまで観てきたように、やはり土器成形の際の回転できる設置方法、すなわち『穴』設置に関連しているものと思われる。井口氏が確認された「同心円をなす擦痕ないし圧痕」もまた、穴に設置して回転した時に生じたものと考えることができるのではないかと推察する。

『穴』設置によって成形し、その際に最初の押圧擦痕が生じる。その押圧擦痕は施文の過程で消される。施文の方法に左右されるが、下部施文後上部を成形ないし施文する時、再び押圧擦痕が生じる。それが残されている痕跡ではないかと考えるのである。

ここで、施文方法および施文時期が重要なポイントになっていることが一層はっきりしてきた。以下もう一度施文方法と土器成形との関連を確認しておきたい。

## VIII 施文と成形

施文は器壁の堅さがどの程度になった時に行われるのか。その時期を左右するのは①器壁の厚さと②施文具である。

施文を行うとき器形が崩れないようにしなければならない。器壁が厚ければ、柔らかくても施文のとき器形は崩れにくい。器壁が薄ければ、乾燥して十分な堅さにしなければ施文できない。いままで筆者が多く作ってきた箱清水式土器は3mmから7mmであった。粘土紐を輪積みにし成形するとき、乾燥させ一定の堅さにしながら積み上げなければならない。もちろん櫛描文の施文にも器壁の一定の堅さが必要となる。

その際施文具の種類および施文具の操作によって、要求される器壁の堅さに違いがでてくる。まず操作面での違いを簾状工具で櫛描文を描く場合にみてみよう。畿内型の波状文を回転用具を用いて回転させながら右側から工具を当てて施文するときには、力が余り加わらないので比較的器面が柔らかくても器形を崩さない。しかし中部高地型の波状文を土器を正面に据えて行くと、だいふ力が加わるので一層の器壁の堅さが要求される<sup>9)</sup>。このように施文具の使い方によっても違いがでてくる。がここで、施文具の種類によって器壁に加わる力が違う点を考え、施文具を大きく次のように分けておきたい。

- ①描出施文具…簾状工具・櫛歯状工具等、棒状工具等、描くことによって文様表出する。
- ②押圧施文具…縄文原体・押型文原体・撚糸文原体等、回転押圧によって文様表出する。
- ③刺突施文具…爪型文原体の可能性のある半裁竹管・竹管等、刺突によって文様表出する。押し引き施文にみられるように描出施文具と兼用され得る。

一般に押圧施文具では回転施文の際、器壁に力が加わりやすく、器壁がそのため歪みやすい。前述した再現製作の資料土器とした山の神遺跡の細久保土式土器は器壁もおおよそ6mmと薄い。そこに山形文の刻印が明瞭に残されている。施文時の器壁の堅さは十分なければ施文ができなかつたはずである。その点郷土遺跡の縄文施文尖底土器は器壁の厚さ11mmを超えている。はるかに柔らかい状態で施文が可能である。両者の押圧擦痕の違いにそれが現れている。前者に対し後者の押圧擦痕の痕跡がより深くなっているのは、後者の底部施文がより柔らかい状態で行われ、その後『穴』設置が行われたことを示していると考ええる。すでに述べたようにこの土器には、成形の早い段階で生じたと思われる底部の歪みがある。これも、より柔らかい状態で粘土を積み上げ、回転しながら成形した際にできた歪みではないかと推察される。

このように『穴』設置による痕跡は、土器成形・施文技法の違いによって、さまざまに異なる様相を示しているものと思われる。さちにその観察を緻密に重ね、そこから得られる情報を、今後の土器追及に活かせればと考えている。

## IX おわりに

一般に、押型文尖底土器には薄手のものが多い。しかも鮮やかな施文痕を残している。この尖底土器の再現製作を試みながら、縄文早期の土器製作の技法が極めて質の高い優れたものであることを痛感させられた。土を求め、器形を追及し、文様に意志を託す、土器作りの合理的技法。それは我々が考えている以上に高いレベルに到達していたのだ。

この土器製作実験を進め、拙文を草するにあたり、井口直司氏、上田典男氏、土屋積氏、賛田明氏には、参考文献の紹介等を含め細部にわたりご教授ご協力を頂いた。

青木一男氏、宇賀神誠司氏、風間春芳氏、川崎保氏、鶴田典昭氏には資料提示等にかかわり  
ご協力ご助言を頂いた。

ここに多大なる謝意を表したい。

#### 註

- 1 箱清水式土器は中部高地の千曲川流域に分布する弥生後期の土器である。器種構成は壺・甕・高杯・鉢等より構成される。中部高地型櫛抽文と赤色塗彩で加飾される点が特徴である。
- 2 青木一男 1998年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市内その3 松原遺跡 弥生・総論5』長野県埋蔵文化財センターより
- 3 徳永哲秀 1998年「第6節 箱清水式土器の施文技法」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5 長野市その3 松原遺跡 弥生・総論5』長野県埋蔵文化財センター参照。
- 4 桜井秀雄ほか 2000年『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19』長野県埋蔵文化財センターより
- 5 徳永哲秀 1995年「箱清水式土器の櫛描文の施文具および施文法について」『長野県考古学会誌』75長野県考古学会参照。  
描出施文具・押圧施文具の用語については、Ⅷで解説している。
- 6 前掲註5
- 7 この成形と施文の方法に関して、黒坂氏が「追加成形施文法」といわれ、その存在を指摘されている。  
黒坂禎二 1989年「羽状縄文系土器の文様構成（点描）－1」『研究紀要』6 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 8 井口直司 1987年「尖底土器底部圧痕類の研究」『東京考古』5 東京考古談話会参照
- 9 前掲註3